



ゲノムの先端研究を通じ、未知の領域に挑む
親泊教授＝徳島大疾患ゲノム研究センター（吉本旭撮影）

糖尿病研究積み重ね

「大発見だ。これで学問が変わる」
1997年秋、熊本大学医学部の研究室。
「大発見だ。これで学問が変わる」

遺伝子の研究が現代医療を進化させると信じ、研究者へと歩を進めた男は、糖尿病と遺伝子との関連性を示す実験結果が現像されたフィルムを手に、一人興奮していた。

男性の名は親泊政一さん（42）。当時は大学院に入つて1年目。その後も研究を積み重ね、2008年春、徳島大学疾患ゲノム研究センター（徳島市蔵本町3）の教授に着任した。

「國內で予備軍も含めて年間70万人も増えている。徳島県の人口に近い数字。同じように不摂生をして、なりやすい人とうでない人がいて、原因ははつきり分からぬ。治療薬も血糖値をコントロールする薬ばかりで、治す薬はない。未開拓部分が多くすぎる」。これが研究にめり込んだ動機だった。

「小胞体」に目をつけた。細胞内小器官の一つでタンパク質工場とも呼ばれる「小胞体」に目をつけた。

血糖値を調整するインスリンをはじめ、細胞外に出るタンパク質は必ず小胞体で取り組んでいる。

当時、医学界で注目を浴びられた。親泊さんは糖尿病が専

夢を追う

▶ 5 ◀

びていたのが「ゲノム」だった。ゲノムとは生物が持つ全遺伝情報のこと。このうちタンパク質の作成にかかる部分が遺伝子。遺伝子がいつ、どれだけタンパク質（細胞やホルモン、消化酵素など）を作るかは、ゲノムに書き込まれたプロ

グラムでコントロールされてしまう。この小胞体ストレスと糖尿病との密接な関係を証明したのが冒頭の97年の発見だ。インスリンをつくった。インスリンをつくっているとの目標がある。徳島では小胞体ストレスを治すことができれば、病気にならぬくなる。小胞体ストレスが起こることを遺伝子、強くなるのではないかといふのが、院生として研究に取り組む生活をスタートさせた。

感的に、この研究が新しい領域を切り開くと思った」すれば糖尿病を治すことが可能だ。この新システム

である。これは、いわば研究者としての「ゴールだ」と確信を持っている。宝探しのようで楽しみだ」と面接を受けられれば確実に治せる。そういう個人個人に合わせたオーダーメード型の薬のもととなる化合物は数十万種もある。「従来の医療は、そう遠くない時期に実現するだろう。今までの医療を劇的に変えるのが、この医療を劇的に変えるのが、徳島だ」。未知の領域を開拓してきた研究者として、いよいよ最終ステージに突入する。

Q 前身のゲノム機能研究センターを含めると14年の歴史がある。未解決の病気の克服などを主な目的とし、今は教授6人がさまざまな角度からの研究に

（編集委員・門田誠）
●おわり

徳島大学疾患ゲノム研究センター 08年4月設立。
○ ○ ○

（編集委員・門田誠）
●おわり